

東條義門の三語學書の初刊について

龜田 次郎

一

本居父子に依て大成された活語てにいをはの研究は、後に若狹小濱の妙玄寺東條義門に依て完成された事は、國語學史上顯著な事實である。然るに此等諸學者研鑽の跡を留めた其著述の刊行年月が、今日尙不徹底な叙述や、又間違つた儘で、世に擴がつて居る様である。其内容の學說丈を窺知する上から見ならば、其著述の刊行年代は何時であらうと構はないであらうが、然し國語學發達史の見地からいへば、苟も斯界一世の學者の著述で、而も各劃期的のものに於ては、其正確な時代を闡明しておかねばならぬ必要があると信ずる。自分は曩に本誌に本居宣長翁の國語學史上一劃期をしてゐる二著述について、其刊行年代を論述したが、今また本誌に於て其學說の繼承者で、而も其完成者でもある東條義門法師の三著書について、其刊行年代を闡明せうとおもふのである。此三書も亦一劃期的のものである。聊國語學史研究に資

する所があらば幸である。

二

東條義門法師は、國語學史上屈指の學者である。其著作の大部分は語學書である。今自分は其多數の著作の中から、三部、即ち「活語雜話」「活語指南」「玉緒線分」について述べるのである。何故ならば此三部の初刊年代が不徹底な叙述や、間違つた記述の儘で世に傳へられてゐるからである。年代順に、先づ「活語雜話」からいほう。

「活語雜話」三篇三卷は、法師と知友との間の語學上の論辨を集録したもので、斯學上貴重な資料が澤山載つてゐる。此書は法師の國語學の學識の廣さが推知されるものである。本書は初二、三の三篇三冊刊行されてゐる。「玉緒線分」初刊本（後ニイフ）の奥付の廣告に「活語雜話初編至四編と見えてゐるが、四篇は未刊である。此第四篇が法師の別著、活語餘論（未刊）であるとの説もある。兎にも角にも本書の刊行は以上三篇三冊に止まる。然らば此「活語雜話」の初刊は何時であるか。赤堀又次郎編「國語學書目解題」に依ると、

第一篇 天保十年二月刊、京、惠比須屋市右衛門發行

第二篇 天保十一年刊、京、惠比須屋市右衛門發行

第三篇 天保十三年九月刊、京、戎屋市右衛門發行

とある。又各種の國語學史は勿論、松見句堂編「義門法師」(大正三年八月五日増訂再版)は、皆これと同様

である。此等諸書の記事が少し不徹底な所があるのである。又、今日尙これを繼承してゐる者が多いのである。然らば眞正の初刊年月は何時であるか。自分の從來調査した所に依れば、以上三篇中第三篇には違ひはないが、其初中二篇の初刊の年代が前記の各書所載と異つてゐるのである。自分が妙玄寺所藏本で見た所や、また現に自分の所藏本に依ると題箋は第一篇のは、草書で「活語雜話 全」と記し、初篇とも第一篇とも記して無い。然し第二篇は、同じ草書で「活語雜話 全」と縦横に記してあり、第三篇のは同じ字體で「活語雜話 三編」と記してある。又初中二篇の終末を見るに、

初篇は天保九年戊戌刊成、

二篇は天保十一年庚子刊成、

とある。赤堀氏其他諸氏所説と其刊行年月が少し違つてゐる。これは何故であるか。前記赤堀氏等の所説の刊行年代のあるものは、今日多數世上に流布してゐるものである。然らば此異同は何に基因したのであるか。今下に自分の管見を述べよう。

此活語雜誌は、各篇其成功年月が異つてゐる。従うて其出板も順次續刊したのは明かな事實で、現に今日世上に流布してゐる古刊本で、各篇其大さ、表装、奥付の廣告などの異つてゐるのでも證せられるのである。最初第一篇を刊行するに當つて、出版元は年内に發行の豫定であつたから、最終に天保九年戊戌刊成と彫つておいたが、何か事情があつて、到底年内に出版する事が出来ない様になつた。且當時書籍出版の届出には、出版書籍を役所へ提出して許可を得ねばならぬ。然るに出版は豫定の期日に間に合はず、翌年春に延引した。そこで出版元では豫め彫刻してあつた末丁の刊行年月を改彫し、翌年出版の事にして「天保十年己巳二月刊成」として茲に正式に發行したのである。斯る事實は舊幕時代の出版には類例のあつた事と聞いて居る。處が以前發行の豫定で多少刷つてゐたものがあつたのを、出版元では之を著者、其他の關係者等に贈り、且またこれを翌年正式出版の際に混ぜ合せて發行した様である。現に妙立寺所藏本や、自分の所藏本で、著者義門法師の門人古川教典翁の舊藏本であつた此第一篇は、此豫定刊本であるのは、この事實を證明すると思ふ。それで此第一篇の刊成年月に、

天保九年戊戌刊成

天保十年_亥二月刊成

の二種があつて、而も豫定のものには月名を刻むべき部分が黒色で印刷されてゐる譯である。要するに豫定は成稿の年内に出版であつて、其年内に多少刷出したが、正式の刊行は翌年二月になつた様である。畢竟實際の刊行は天保九年末で、公式の刊行は其翌十年春二月であつたのである。それ故に今日世間に流布する古刊本には、天保十年二月本が普通で、而も奥付に「山口柔以下十部」の法師著述目錄が二段に列記され、其次に「製本所寺町通蝟藥師下ル町惠比須屋市右衛門」と印刷されてゐる。之に反して最初豫定の刊本には、奥付には何等の印刷も無く白紙の儘である。これは極めて少數であるが、折々見出される。

次に第二篇は如何といふに、これも亦二種ある。即ち其末丁に、

天保十一年_子 刊成

天保十一年_子 八月刊成

とあるものである。これは第一篇刊行の場合と同じく出版の豫定期日を天保十一年と定めて、初めは月名の所は彫刻せずにしておいた。多少の事情はあつたかも知れないが、先づ豫定の年内に萬事滞無く運んだので、茲に「八月」の二字を後刻して正式

に出版した様である。然し豫定のもの儘で、著者や其他關係者に、正式出版前に寄贈配本したのが天保十一年子庚刊成とある月名無き刊本である。それ故この月名の部分が黒色で印刷されて奥付には何等の印刷も無く、白紙の儘である。これは妙立寺所藏本にもあるし、又時々世上に見出される。勿論少數である。これが實際の初刊本で、正式の初刊本は天保十一年子庚八月刊成と月名が明記されてゐるもので、今日普通に世間に流布するものである。第一篇の奥付と同様に、法師の著述目録十部の列記、製本所の所在地、名前が印刷されてゐる。

序にいつておくが第三篇は刊行の前々年天保十一年末に知人大江東平の序をも加へて全く成稿し、翌十二年辛丑九月に彫刻用の淨書も出来た際、この東平から用字の活用について質疑したので、詳論は次の第四篇に譲るとして、其主張和行一段説を書添へて出版の事とし、其翌十三年九月に正式刊行したのである。即ち

天保壬寅九月刊成

とあるもので、奥付には、活語指南以下八部の法師著述目録を二段に列記し、其次に

江戸芝神明前三島町

岡田屋嘉七

大阪心齋橋安土町角

製本所

河内屋儀助

皇都寺町通錦小路上ル

戎屋市右衛門

と三書肆の名が並記されて初中二篇の戎屋單獨出版で無いのが異つてゐるのである。これが初刊本である。此第三篇には異本は無い様である。世間流布の古刊本は皆これである。此第三篇丈は何等の故障も起らずに無事刊行を遂げられた様である。第三篇の終にも第四篇云々の事が記され、又初刊「玉緒線分」後ニイフの奥付にある「義門大徳著述目錄」中にも「活語雜話」初編至四編とあるが、この第四篇は刊行に至らなかつたのである。法師の別著「活語餘論」(寫本)(三卷)がそれであるとの説がある。これは本篇の趣旨でないから、別に論述せぬ。只第四篇は未刊である事丈いつておく。

以上述べた所で「活語雜話」三篇三冊初刊の事情を明かにしたとおもふ。餘談であるが、此書は後年板を重ねて、明治二十年前後に至つて京都細川開益堂から戎屋原刊の板に依つて、再度出版された。最初刊行の分は題箋書名の下に各編の文字を横書に入れて見返しに、新に「妙立大徳著活語雜話」全三冊、京都書林細川開益堂藏と三行に

記し、第三篇の奥付には「和漢洋書籍所、京都三條通寺町西入南側、開益堂、細川清助」と大
 字で三行に記されてある。尙此刊行本には第三篇卷首に「天保壬寅孟春伊藤馨撰」の
 漢文の序文が二丁附いてゐる。此漢文序は、初刊本には全く無い。後刊の折添附し
 た様である。此刊行年代はわからぬが、表装や用紙から推測すると、明治二十年前後
 の様である。又後刊の分は此最初のものと同じであるが、只第三篇の奥付が洋
 紙茶色の印刷で、尾形光林筆光林百圖四冊以下九部を三段に列記し、其次に

明治廿七年二月二十日印刷
 同年三月五日出版

編輯者 寺田岩次郎
 京都市下京區川原町四町上ル米屋町四十二番戸ノ内六號

同市下京區三條通り寺町西エ入

發行人 細川清助

東京銀座三丁目

同 細川芳之助

京都市下京區綾小路柳馬場西エ入

寺田榮助

としてある。刊行年代も明記してある。此後刊本は當時國文語學復興の際であつたので出版したのであらう。此細川板は兩度の分共に古刊戎屋本の正式出版本である。蛇足であるが、後刷本の事を茲に附記しておくのである。

三

次は、活語指南二卷である。此活語指南には同名のものが二本ある一は寫本で一卷若くば二卷本で、一は刊本二卷本である。前者は原名詞の道しるべ」といひ、文政元年十一月九日に成功したもので、純然たる法師の著述であるが、未刊で今日寫本の儘に世に傳つて居るものである。後者は書名は同じであるが刊本である。其序文にも見えてゐる如く、元來は社中の平井重民が法師の著和語說略圖一鋪(天保四年成同十三年刊)の考證を物したのを、法師が補訂したもので、嚴格にいへば平井重民撰東條義門補訂ともいふべきものである。今自分が茲に述べる所は此後者刊本の方である。此二卷本は普通義門法師の著といはれて居る。活語てにをはの研究である。此刊本については、赤堀氏の國語學書目解題に、

天保十二年三月廿七日刊 新井守村藏板

と記してある。福井久藏氏の日本文法史長連恒氏の日本語學史松見句堂氏の義門

法師も同様の記事である。然しこれは誤謬である。以上諸書の記述は新井守村の跋文の出来た時であつて、刊行年月ではない。殊に赤堀氏が新井守村藏板とされたのは、跋文所載の上から考へられたゝめである。此書の刊行は法師の歿した翌年天保十五年三月で、これが初刊本である。この事はまた一面には本書が純然たる法師の著作でないために生前出版されなかつた證據ともなるのである。現に自分の所藏本では、此書下巻終末の奥付表に「若狹妙立寺義門大德著述目錄」として「山口采三冊以下十四部を二段に列記し其裏に、

天保十五甲辰年孟春

發行	京都	勝村治右衛門
	大阪	蛭子屋市右衛門
書肆	江戸	河内屋儀助
		英屋大助
		岡田屋嘉七

と印刷してゐるので其年代がわかるのである。此種の刊本は世間に流布してゐる。然るに後刷本で此終末の一枚を添へ無いで出版したのがある。それで赤堀氏は

此終末の一丁缺けてゐる後刷本に依り、新井守村の跋文を見て、其文中の記事から上記の如く定められた様である。福井、長、松見三氏は亦これに依據されたのであらうとおもふ。誤謬の原由は茲に存する。本書は、また明治時代になつて「頭書活語指南」と題し、見返しに「義門師脱稿重民翁補成、里見義頭書、校訂活語指南、全二冊、東京叢書閣發兌」と三行に記し、奥付には、

明治十八年一月廿八日版權免許
同年六月出版

故人

脱稿者 義門師

故人

補成者 平井重民

福岡縣士族

校訂者 里見義

日本橋區蠣殻町三丁目十一番地

東京府平民

出版人 丸家善七

日本橋區通三丁目十四番地

と印刷してある。これが活語指南の欄外に舊小倉藩士里見義氏の頭書を加へたもので國語書目解題に

里見義校訂 明治十八年刊、東京丸屋善七發行

とあるものである。本書の見返の文字は、亦一面に法師の純正の著述で無い證とも見られるとおもふ。

四

次は玉緒繰分五卷である。これは本居宜長翁の名著詞の玉緒を補正したものである。法師の友人幕末明治初期の考證家岡本況齋翁をして「これは誠に本居氏の忠臣にて杜預の左傳にかしつくごとし」詞の玉緒攷所載と激賞せしめた程の名著で、實に法師が本居翁の學説の完成を遂げた一傑作である。本書の初刊については國語學書目解題に

玉の緒繰分五卷、天保二年十二月起稿、天保十二年刊

としてある。福井、長、二氏の著亦同様である。然し諸書の記事は何れも誤謬である。天保十二年は初刊年月では無い。加納諸平の跋文を記した年月である。然らば本書の初刊年代は何時であるか。其は前記活語指南の様にまた法師の歿後の出版で

あつて、嘉永四年春の刊行である。これが初刊本である。此初刊本は法師の門下古川教典翁舊藏本（細川閑益堂所藏）や、自分の所藏本や、其他世上往々流布の古刊本に、其見返に「義門大德著全五冊玉の緒繰分京攝三書房合梓」と三行に黄唐紙に印刷してある上に、其奥付に「義門大德著述目録」として「山口栞三冊以下十二部を二段に列記し、其次に

嘉永四年辛亥春

京都 勝村治右衛門

大坂 河内屋儀助

心齋橋筋本町角

同 河内屋藤兵衛

心齋橋博愛町角

同 河内屋茂兵衛

と印刷してあるものである。此刊本見返の文句と奥付に並記した京阪書肆名とが一致してゐる。大坂河内屋三軒は事實本別兩家である。それで奥付の京坂の書肆の名前は四名であるが實際は三軒である。殊に表装や用紙や印刷の上から見ても、此年月のあるのが初刊本であることが一目瞭然である。由來法師の著述初刊本には大抵其著述目録が載せてあるのである。又法師歿後刊行の著述は、前記の「活語指

南といひまた此玉の緒線分といひ、其後刷本には其出版年月を削去したのである。已に此事は「活語指南」の條にもいつたが、本書も亦それを削つたのである。本書の後刊本には、見返は初刊の儘であるが、奥付には下の十一書肆が列記してある。即ち

京都寺町通佛光寺

河内屋藤四郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同 南傳馬町壹丁目

山城屋政吉

同 下谷御成道

英 文 藏

同 大傳馬町貳丁目

丁字屋平兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

大阪心齋橋筋本町角

河内屋藤兵衛

大阪心齋橋筋博勢町角

河内屋茂兵衛版

書

林

である。刊行年月は印刷して無い。表装や用紙や印刷の磨滅した點から見て、これ

は後刷本である。又この中で大坂河内屋一統の名は、二軒丈より見えないのは前記初刊本の處でいつた如く、實際二軒であることがわかるであらう。又本書の見返は初刊其儘で、奥付に、

和漢書籍賣捌處
西洋

大阪心齋橋筋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

として、また刊行年月の存しない後刷本が出板されて居る。これは本文印刷の磨滅や奥付の文句から見ても、明治初年の刊行であることがわかるのである。尙近くは、見返は元の儘で、奥付に、

和漢書籍
并ニ法帖類賣買

西京寺町通綾小路下ル町

製本所 川勝徳次郎

とした刊本もある。以上三種は何れも後刷本であるのは無論であるが、赤堀氏は此等後刊本の何れかを見て、其刊行年月の無いために、加納諸平跋文に據つて天保十二

年刊とせられたものであらうと考へる。福井、長、二氏は赤堀氏所記によつて書かれたものであらうとおもふ。

五

最後に附加しておくのは、嚴密にいへば語學書では無いが、多少語學上にも關係した點もあるから、聊述べるのは、また法師の著述で、「三部經和語說」といふのがある。これは又「入言小補」「眞宗聖教和語說」「和語說」といはれるもので、三卷本か五卷本かである。従前は寫本で世に傳つてゐたが、第一卷丈は、明治十一年五月に初めて京都護法館、西村九郎右衛門から和裝半紙活字本となつて出版された。此活字本は世に流布してゐる。現に大谷大學圖書館にも在る。然るに此十一年五月刊行を「國語學書目解題」には六月刊と記してある。僅一ヶ月の違ひであるが、これも其正確を期するため、序に茲に訂正しておく。本書全部は「眞宗聖教和語說」の名で、五卷本が、大正四年「眞宗全書」第五十六冊に收められて出版された。これも亦矢張法師歿後の刊行である。

六

以上叙述した所で、一世の國語學者東條義門法師の著述四部の初刊年代を明かに

したとおもふ。尤も最後の一部は、嚴格にいへば語學書では無い、寧ろ宗義の講説である。自分が表題に三語學書としたのも、全く其理由からである。我國語の爲に一意専心研究を遂げて、先人の學説を完成した此篤學者の著作について、闡明したのは、吾々後進が聊微衷を表した次第である。近時國語學の進歩は非常であるが、其學説の大部分の骨子は、實に此先哲の大なる賜である事を忘れてはならぬ。自分が曩に鈴屋翁の高著に關して管見を述べ、今亦此法師の名作について鄙説を公にしたのは、多少斯學研究の士に資する所もあらうかと思惟したからである。若し幸に參考ともならば本懷の至である。

(大正十五年十一月二十三日夜稿)